イスラエルとユダヤ人に関するノート

佐藤優

イスラエル支持は、日本の国益に資する

国際政治と歴史と聖書に照らして書き下ろされた
筆者の極秘の考察ノート

ミルトス　定価 2,000 円＋税

イスラエルとユダヤ人に関するノート／目次

まえがき　5

Ⅰ　私とイスラエルについての省察ノート

1話　なぜ私はイスラエルが好きか　14
2話　旧約聖書の再発見とヨムキプール戦争の教訓　35
3話　獄中の私を支えてくれたイスラエルの友人たち　48

Ⅱ　ロシアとイスラエルの考察ノート

4話　モスクワのオランダ大使館領事部　60
5話　ナティーブの対ソ秘密工作　66
6話　ロシア・グルジア戦争を分析するイスラエル専門家の視点の重要性　72
7話　プーチン露大統領のイスラエル訪問の意義　79
8話　イスラエル外交に働く目に見えない力　90
9話　シャロン元首相とロシア　100

Ⅲ　日本とイスラエルの考察ノート

10話　『スギハラ・ダラー』から杉原千畝を読み解く　*110*
11話　東日本大震災をどう考えるか　*128*
12話　福島第一原発事故に関するあるイスラエル人との会話　*138*
13話　F35問題をめぐる武器輸出三原則の解釈がイスラエルに与える影響　*148*
14話　国家安全保障会議（日本版NSC）とイスラエル・ハイテク産業　*157*
15話　画期的な日本・イスラエル共同声明　*167*

Ⅳ　イラン、シリア、北朝鮮の考察ノート

16話　中立国と情報工作　*178*
17話　イラン危機と日本　*184*
18話　イスラエルとイランの関係をどう見るか　*194*
19話　イランと「国交断絶」したカナダに学べ　*204*
20話　孫崎亨・元外務省国際情報局長のイラン観について　*214*

21話　北朝鮮によるシリアの核開発支援にイスラエルはどう対処　224
22話　シリア情勢を巡る日本の独自外交　234

V　キリスト教神学生への手紙

23話　ある神学生への手紙――『トーラーの名において』の評価　246
24話　あるキリスト教神学生からのメール――ユダヤ民族の否定について　255
25話　反ユダヤ主義の歴史について1　265
26話　反ユダヤ主義の歴史について2　274
27話　キリスト教とイスラエル――『キリストの火に』を読む　285
28話　ホロコースト生き残りの証言　315

あとがき　327

まえがき

イスラエルは独特の魅力がある国だ。イスラエルは通常の国民国家ではない。全世界のユダヤ人を擁護するという特別の使命を持っている。それだから、イスラエル人は、つまらない常識の枠組みにとらわれない自由な発想をすることができる。

真理は具体的でなくてはならないので、実例を示す。去年（二〇一四年）五月にイスラエルに出張したときに元イスラエル政府高官で現在は民間のシンクタンクを主宰している人から聞いた話のメモだ。外交官やインテリジェンス機関の公電（公務に用いる電報）のスタイルで私はメモを残した。

〈国際関係の構造的変化
情報源：元イスラエル政府高官
入手時期：二〇一四年五月下旬

1．過去二十年で、国際社会の構造が抜本的に変化している。その根本要因は、ソ連型社会

主義体制の崩壊である。

2．民主主義的な国家は、カネと情報に対する統制を失いつつある。

3．以前から、世界全体の上位五パーセントの富裕層が、富の相当部分を保有していた。このような金持ちは、共産主義革命を恐れたので、国家の反共政策に協力し、富の再分配にも応じた。共産主義体制の崩壊によって、富裕層には政府の要請に応じて富の再分配を行なう動機がなくなった。

4．さらに富裕層の上層部に富が蓄積される傾向が強まっている。個人で途上国の年間予算以上の資産を持っている人も珍しくない。ＩＢＭの資産は、中堅国家のＧＤＰに相当する。このような事態は、過去になかった。政府の金融、財政政策が実体経済に与える影響もきわめて限定的である。

5．さらに政府は情報に対する統制を失った。質量共に飛躍的に増大する社会の情報を政府部門は把握することができない。情報テクノロジーの進歩のスピードに政府機関はついていくことができない。

6．もちろん民間部門は軍隊のような暴力装置を持っていない。従って、国家の暴力装置を背景にカネと情報を統制することが、理論的には可能である。しかし、現実的に考えた場合、民主主義制度の発達した国で、このようなシナリオを採用することは不可能である。そもそも軍人は政治に関与してはならないという教育を民主主義国では、職業軍人に対して徹底的に刷り込んでいる。この刷り込みの枠組みから、軍隊全体が逸脱することはでき

ない。社会における軍人の地位が高いイスラエルでも、将官クラスの経験を持つ軍人が政治に関与することが以前と比べ、はるかに少なくなっている。

7．政府と民間部門のギャップを埋める新しいメカニズムが生まれている。ビル・ゲイツをはじめとする超富裕層に属する人々は、例外なく自らのファンド（基金）をつくり、そこに私財を投入している。大雑把に言って、超富裕層は個人資産の五〇パーセントを基金に寄付している。これは慈善事業ではない。超富裕層が、政府を経由しないで社会に富を還元するメカニズムを作ろうとしている。超富裕層が自らの地位を安定的に維持するためには、このような富の再分配機構が不可欠になる。この種の基金は、超富裕層と社会をつなぐパイプなのである。

8．このようメカニズムが普及することによって、政府の社会に与える機能は、当然のことながら弱くなり、社会における国家の占める場も少なくなる。米国のケネディ・センターには、「あなたが国家から何をしてもらえるかでなく、あなたが国家のために何をできるかを考えよ」というスローガンが書かれているが、いまやそれを「あなたが国家から何をしてもらえるかでなく、国家なしにあなたが何をできるかについて考えよ」と書き改める必要がある。いずれにせよ、政府を経由しない富裕層から社会へのパイプが国内外の政策策定に無視できない影響力を行使するようになっている。

9．ウクライナ危機で、民族問題の危険性が再認識されている。民族問題をめぐっては悲観論に立たざるをえない。歴史は繰り返す。民族問題は解決されたのではなく、停滞期に

入っていたに過ぎない。再び民族意識高揚の波が世界的規模で襲っているのだと思う。人間の性格は百年程度の短期間に根本的に変化することはない。波動が繰り返すだけである。

10. 米国のオバマ大統領には、歴史哲学がない。それだから、民族主義の危険性を過小評価している。

11. イスラエルとして警戒しているのは、世界的規模での民族主義の高揚が反ユダヤ主義と結びつくことだ。ユダヤ主義には、

第一に宗教的な反ユダヤ主義（ユダヤ人がイエス・キリストを殺したという類いの言説）

第二にユダヤ人は遺伝的に他の人々と異なるという人種主義的反ユダヤ主義がある。たいていの場合、反ユダヤ主義にはこの二つの要素が混在している。

特に、超富裕層の政治と社会に与える影響が大きくなりつつある中で、「金持ちのユダヤ人が世界を動かしている」という類いの反ユダヤ主義が再び台頭する危険がある。ユダヤ人に、金持ちもいれば貧乏人もいる。その点については、他の人々と変わらないのに、反ユダヤ主義者には現実が曲がって見える。ウクライナとロシアの双方で、反ユダヤ主義が高まりつつある。

12. ウクライナ問題に関して、イスラエルは米国と一線を画している。この問題に深入りすることで、ロシアのユダヤ人に不利益があってはならないという観点でネタニヤフ政権は対応している。同時に、ロシアとウクライナの間でもイスラエルは厳正中立の立場を崩していない。どちらかに加担することで、両国に居住するユダヤ人に不利益が生じることを

警戒しているからだ。

13. ガリツィア地方（ウクライナ西部）のウクライナ民族主義者の反ユダヤ主義は、ナチス・ドイツに劣らない。ガリツィアからイスラエルに移住したユダヤ人の親族の多くがウクライナ民族主義者によって殺害された。この記憶が残っているので、イスラエル人はウクライナ新政権に対しても警戒心を持っている。

14. ロシア、中国、イランなどは、十九世紀の古典的戦争観に基づいて政策を遂行しているように思える。すなわち、戦争には、必ず勝者と敗者があるという前提で、勝者には戦利品を獲得する権利があるという発想だ。

これに対して、米国、EU、イスラエルは、国内的コストを考えると、なかなか戦争という手段に訴えることができない。従って、外交への依存度が高くなる。問題は、イラン、ロシア、中国が、「欧米が強硬な警告を発してもそれは口先だけで、戦争には訴える腹はない」と、認識していることだ。

従って、今後、しばらくの間、戦争に訴える覚悟をした諸国が国際政治において実力以上の影響力を行使することになるであろう。

15. 中東においては、偶発的な武力衝突が発生した場合、その拡大を防ぐノウハウがイスラエル、アラブ諸国、イランのいずれにも備わっている。これに対して、東アジアでは、経験が少ないために、偶発的な武力衝突の拡大を抑えることができなくなる危険がある。米国は、それだから、尖閣諸島をめぐる日中間の緊張に強い危機意識を持っている。〉

このレベルの情勢分析や予測ができるイスラエルの専門家を私は何人も知っている。イスラエルだけが、特に秘密の情報源を持っているわけではない。情報の量と言うことならば、NSA（国家安全保障局）によるシギント（盗聴や通信傍受を用いたインテリジェンス活動）を行なっている米国の方が圧倒的に多く持っている。ここで重要なのは、元イスラエル高官が述べている「政府の社会に与える機能の変化」、「民族問題は解決されたのではなく、停滞期に入っていたに過ぎない」、「古典的戦争観と現代的戦争観の相克」という切り口だ。さらに言うと、「人間の性格は百年程度の短期間に根本的に変化することはない。波動が繰り返すだけである」という突き放したものの見方、考え方だ。

本書で私は、イスラエルとユダヤ人から学んだ事柄を記した。単に知的好奇心を満たすことではなく、「全世界に同情されながら死に絶えるよりも、全世界を敵に回しても生き残る」という気概を持つイスラエル人の愛国心、さらにそれを支える神理解（そこには一見、無神論のように見えるが、深い位相で神を信じている場合もある）から、日本国家と日本人が生き残るための知恵を学ぶことが、私が本書を著した目的である。

日本とイスラエルの国家間関係、日本人とイスラエル人の人間的関係を深化させるために、今後も私は努力していきたい。

佐藤　優

I

私とイスラエルについての省察ノート

1話　なぜ私はイスラエルが好きなのか

日本の論壇では、中東問題について、親パレスチナ、親イランの言説が大手を振るって歩いている。筆者は、数少ない、イスラエルの立場を理解しようとつとめる論客に数え入れられているようだ。講演会の質疑応答でも、（あまり数は多くないが）思考が硬直し、自らが日本人であることを忘れ、ハマスやヒズボラの代理人であるかの如き人を相手にすることがある。

あえて挑発的な表現をするが、平均的日本人が中東問題について発言する場合、イスラエルを支持するか、ハマス、ヒズボラ、イランを支持するかは、究極的にその人の「贔屓（ひいき）筋」の問題と思う。論者の趣味、あるいは差異の問題と言い換えてもよいかもしれない。ヘーゲルの理解では、矛盾や対立は解消可能であるが、差異は解消できない。

筆者がイスラエルを支持する理由はいくつもあるが、その基本は、日本とイスラエルが、国際関係の「ゲームのルール」を共有していることだ。ハマス、ヒズボラ、イランは、いずれもイスラエルの生存権を否定している。これに対して、イスラエルは、イラン、レバノンという

存在を認め、将来のパレスチナ人国家の創設を認めるという基本的立場をとっている。

イスラエルを植民地扱いし、ユダヤ人を追放するような乱暴な言説が日本で流通していることは、偶然でない。構造的要因がある。その原因の一つが日本外務省のアラビア語専門家の養成システムにあると筆者は考えている。

外交官の語学研修

外交官は、キャリア（国家公務員採用Ⅰ種試験合格者）、ノンキャリア（外務省専門職員採用試験合格者）のいずれであっても二〜三年の在外研修を行なう。

外務省は、日本の大学の外国語教育をまったく信用していない。実際、ロシア語やドイツ語でも、大学の第二外国語で単位をとって、中途半端な知識がある者の方が、ゼロからスタートする者よりも語学力は伸びない。外務省の研修生には、学位取得は求められない。それよりも少しでも現地人に近い語学力を身につけろと命じられる。

英語、ドイツ語、フランス語などの研修期間は、キャリア、ノンキャリアともに二年である。これに対して、ロシア語、中国語は、キャリアは三年、ノンキャリアは二年だ。キャリアが一年長いのは、英米で地域研究を行なうからという建前になっているが、実際は英語を習得するためだ。キャリア職員の場合、ロシア語、中国語、アラビア語などの特殊語を研修しても、実務では英語を用いる機会が圧倒的に多い。フランス語、ドイツ語の研修ならば、これらの研修語と並行して、英語を勉強することができるが、ロシアや中国で英語を勉強しても、外交実

務をこなす水準に到達しないので、キャリア職員には一年間、英語圏で研修する機会を与えているのだ。

ちなみに筆者は、ノンキャリア職員であるが、一年間（正確に言うと一年二カ月間）、英国で研修した。ソ連は日本を敵視し、モスクワ国立大学に直接留学しても、ロシア語の基礎力が身につかないからだ。かつて、笑い話のような事実を『自壊する帝国』に書いたので引用しておく。

〈ソ連建国の父レーニンは、西側の外交官はすべてスパイであると考えていた。語学力が弱くてはスパイとしては使い物にならない。従って、〝スパイの卵〟である日本外務省の研修生が、できるだけロシア語が下手になるような特別コースがモスクワ大学には用意されていた。

私たち外務省研修生には、ロシア語の基本文法をシステマティックに学ぶ予科や、外国人へのロシア語教育を専門にするプーシキン大学への入学が認められず、中級程度のロシア語の知識があることを前提とする外国語学部人文系外国人用ロシア語学科にしか受け入れられなかった。人文系学部棟八階の東端にある外国人用ロシア語学科以外の授業を聞くことをソ連当局は認めなかったのだ。ここでは、とても奇妙な授業が行なわれていた。例えば、自由討論のテーマは以下のようなものだ。

「イラン・コントラ疑惑（ＣＩＡ〈米中央情報部〉が国交を断絶しているイランに秘かに

武器を売却し、ニカラグアの親米反政府組織『コントラ』の支援資金にしていたという事件）におけるアメリカとその同盟国の二重基準を批判しなさい」

「日本における少数派差別と、それに対していかなる政治勢力が果敢な闘争を行なっているかについて論じなさい」

この自由討論のクラスメートは、東ドイツ、ブルガリア、シリアの学生で、私以外の資本主義国出身者はノルウェーの大学助手だったが、彼女はノルウェー共産党員だったので、授業では私だけが吊し上げられることになる。〉（佐藤優『自壊する帝国』新潮文庫、〇八年、五四～五五頁）

英国の陸軍語学学校

モスクワ国立大学がこういう状態だから、研修生は英国か米国の陸軍語学学校でロシア語文法の基礎を学んだのである。ロンドン郊外（バッキンガムシャー州）のベーコンズフィールドにある陸軍語学学校のロシア語学科では、毎日二十五～二十七の単語、五～七のフレーズを暗記するというスパルタ式授業が行なわれていた。授業は英語で行なわれるので、同時に英語力もそこそこつく。

今から振り返ってみると、英国でロシア語を学んだことはひじょうによかった。神学や哲学への問題意識が先行していた筆者の場合、ロシア語を習得するためには、軍隊のような施設に缶詰になって、余計なことは考えずにひたすらロシア語学習にだけ専心する必要があったと思

う。さもなければ、文法や基本語彙をおろそかにして、いきなりロシア語の思想書や文学書の読解に取り組んで、結局、かなり怪しげな語学力しか身につかなかったと思う。それと、一年強、英国軍人と将校宿舎で寝食をともにしたために、英語に対する抵抗感がなくなったことも、その後、外交官活動をする上で役に立った。

中東言語の研修先

外務省で、キャリア職員が学ぶ中東言語はアラビア語だけである。研修期間は三年間で、最初、シリアかエジプトで二年間学び、残り一年は英米で中東地域研究を行なう。この英米研修の目的も、中国やロシア語を研修するキャリア職員と同じで、英語に慣れ親しむことだ。

ノンキャリア職員が学ぶ中東言語は、アラビア語、ペルシア語、トルコ語、ヘブライ語である。トルコ語、ヘブライ語の研修期間は二年、ペルシア語は二年半、アラビア語は三年である。ただし、アラビア語を研修する専門職員の場合、キャリア職員のように英米に留学することはなく、シリアもしくはエジプトで三年間まるまる研修する。

外交官は、青年時代に語学を研修した国に惹かれるのが一般的傾向だ。もっともソ連時代にロシア語を研修した外交官だけは、ＫＧＢ（ソ連国家保安委員会＝秘密警察）による嫌がらせを日常的に受けたので、ロシア人を嫌いになる事例が多い。アラビア語研修の外交官の場合、親アラブ的になる人が多い。

筆者が外務省に入省したのは一九八五年であったが、その頃、アラビア語研修生の八割がシ

リア、二割がエジプトに留学していた。当時、シリアはソ連の軍事同盟国だった。エジプトの方が西側と価値観を共有している。それにもかかわらず、シリアに研修生を送るのは、エジプト方言よりも、シリア方言の方が、汎用性が高いという判断からだった。

外務省に入ってくる二十代前半の若者たちは、基本的にノンポリで素直だ。従って、研修地での教育の影響を受けやすい。

「敵ってだぁれ」

一九九九年春のことと記憶している。鈴木宗男内閣官房副長官（当時）から電話がかかってきた。外務省の中東を担当する専門家たちとしゃぶしゃぶを食べるので同席してくれという話だった。

ちょうどその頃から筆者はイスラエルとの関係を深めていた。その会合には、筆者が信頼するヘブライ語の若手専門家も出席するということなので、「よろこんでおうかがいします」と答えた。その日は、ロシア内政に関する資料を作っていたので、午後九時頃に指定された赤坂見附の雑居ビル地下のしゃぶしゃぶ屋に行った。アラビア語の専門家数名とヘブライ語の専門家が二人いた。

会合は七時半から始まった由で、参加者はだいぶワインを飲んだようで、全員、若干、呂律（ろれつ）が回らなくなっていた。鈴木氏は十五分くらい前に来たとのことで、ワインを飲みながらしゃぶしゃぶをつまんでいた。

アラビア語専門家でもイスラーム教徒はあまりいない。しかし、任地でアルコールを飲むことがあまりないので、酒豪は少ない。ロシア専門家の場合、一食で一人あたり五〇〇グラム（ロシアのレストランでは、ウオトカはグラムで注文する。五〇〇グラムは標準的なボトル一本だ）くらいは平気で飲む。だからワインくらいで酔うようなことは滅多にない。アラビア語専門家たちはかなり酔っていたが、意識はしっかりしていた。

あるアラビア語の専門家がヘブライ語の専門家の目を見据えて言った。

「いま、私は敵の言葉を勉強しているからね。いまにみていろ。思い知らせてやるわ」

彼女はなかなかアラビア語がよくでき、現地事情にも通暁しているといわれる評判のよい後輩だった。

「敵ってだぁれ」と筆者が尋ねた。

「ヘブライ語を話すあいつらよ。国名すら口にしたくない」

彼女の瞳の中では、一九六〇年代末に爆発的人気を博した劇画「アタックNo.1」の主人公・鮎原こずえのように炎が燃えている。いったいどうしたのだろうかと筆者は思った。

「敵って決まっているじゃないの。あのシオニストの国よ」この女性外交官は、イスラエルという国名を口にするのをほんとうに毛嫌いしているのである。その話を聞いた瞬間に、筆者にはモスクワ時代の記憶がよみがえってきた。

ユダヤ人に行なわせた反シオニスト委員会

旧ソ連では、建前上、反ユダヤ主義、アンチセミティズムに反対するということになっていた。しかし、実際には反ユダヤ主義がソ連社会全体に蔓延していた。そこでソ連共産党は、「反シオニズム」という言葉を用いた。ユダヤ人は立派なソ連市民であるが、イスラエルへの帰還を求めるシオニストはソ連国家の敵であるというキャンペーンを展開したのである。そして、モスクワに「反シオニスト委員会」という民間団体を組織し、反イスラエル活動を展開させていた。

ソ連当局が陰険だったのは、反シオニスト委員会の運営をユダヤ人によって行なわせたことである。

もちろんソ連に純粋な民間団体など存在するはずはない。後ろでＫＧＢ（ソ連国家保安委員会＝秘密警察）が糸を引いていた。筆者は、モスクワ川のほとりにある「反シオニスト委員会」の本部を一度だけ訪ねたことがある。一九九〇年のことだった。対応した幹部たちは、「日本人で訪ねてきた人は初めてだ」と言って、歓待してくれた。幹部たちは、ゴルバチョフ・ソ連共産党書記長（当時）がイスラエルと国交を正常化することに強い危機感をもっていた。そして、「反シオニスト委員会としては、ソ連のユダヤ人がイスラエルに帰還するよりも、ハバロフスク近郊のユダヤ人自治州に集まって、ソビエト的ユダヤ人の共和国をつくるべきだ」と主張していたことが印象に残っている。

シリアに留学した優等生

この女性外交官のイスラエル観を知って、筆者の心の底から、「これはまずい」という気持ちがわきあがってきた。

「あなた、イスラエルに関して、敵であるとか、シオニストの国などと吐き捨てるように呼ぶのはよくない」

「どうしてですか。パレスチナ人をあれだけ虐殺しているシオニストの存在を私は認めることはできません」

「あなたがイスラエルを認めるかどうかは、関係ない。あなたはどこでアラビア語を勉強したの」

「シリアでです」

「誰のお金で勉強したの」

「自分のお金です」

「違うでしょう。外務省の研修生としてアラビア語を勉強したのでしょう。日本政府のカネで、つまり国民の税金であなたは勉強したんです。僕が言うことがどこか間違っているかな」

「それは確かに佐藤さんの指摘のとおりです」

「それじゃ、今度は少し質問を変えよう。あなたは、シリアを好きですか」

「好きです」

「アラブ人はどうかな」

「アラブ人にも嫌な人もいます。しかし、日本ではアラブ諸国やアラブ人について、あまりに理解が低いです。アラブ諸国に対する偏見を是正する必要があると思います」
「イスラエルは好きかな」
「何を聞くんですか。敵です。大嫌いです」
「どうして」
「パレスチナ人を虐殺し、パレスチナの地を占領し、植民地として支配しているからです。しかも核兵器を保有して、武力でアラブ諸国を脅しあげています。イスラエルの存在が諸悪の根源です」
　この女性外交官は、きわめて真面目なのである。恐らく、学生時代はノンポリの優等生だったのだろう。外交官を志望するのだから、基本的に左翼に対する共感はないはずだ。それが、どうしてこれほど極端な反ユダヤ主義者になってしまうのだろうか？　それは彼女が優等生だからである。まず、留学したシリアにおいて、優等生となり、シリア的世界観でイスラエルを見るようになった。そして、実務についた後も、親パレスチナ的なアラブスクールの中の優等生だから、イスラエルをここまで敵視するようになるのだ。

外交官の職業的良心とは

　筆者は、珍しく強い口調で言った。
「イスラエルの対パレスチナ政策によって、日本にどのような不利益があるのか、具体的に